

日本あちこち河川遡行記（第 255 回）

奈良 1-2. 富雄川（その 1）平成 31 年 4 月 5 日（金）晴

大和川の支流「石川」とその支流群の調査を終え、次は大和川の大和内の支流群に取り掛かることにする。まずは桜の季節なので土手に桜並木が有りそうな「富雄川」を目指す。今日は年に二度ほど一緒に歩くようになった竹馬の友も参加する。今や毎週の利用になった早特切符の「こだま」指定席に乗る。旅行シーズン到来で指定席は満員札止めである。新大阪駅の手前からドアに向かい、高架下の宮原操車場の車両群を見る。今日は「瑞風」が足を休めているぞ。



01.今日は瑞風が宮原に居るぞ

新大阪から大阪駅にむかい環状線ホームの一番西端で友を待つ。知らせておいた「大和路快速」が到着しても来ない。たぶんギリギリに着き東口の方から飛び込んで来るだろうと思って予定通り乗車。すぐに携帯がかかり何とか乗り込んだようで、1号車に来るように知らせる。阪神電車に事故が有り遅れたとのこと。

大和川遡行時に利用した「法隆寺駅」で下車し、本流と富雄川の合流点に向かう。橋上駅の上から下を見ると立派な交番が建っている。二階建て入母屋造りの交番だ。オオー、ワンダフル！駅南口から線路沿いに西に向かうと薄紫に白色が生える小さく可憐な花が多く咲いている。こちらもオオワンダフル！だ。



02.法隆寺駅前交番はデカイな



03.可憐な花が線路際に咲いている

直ぐに南に方向を変え大和川に向かう。1kmほど歩くと見覚えのある橋に到着。すぐに右岸側を東に向かうと合流点である。土手の上の舗装された道を進むと自動的に富雄川の右岸の土手となる。東から北に方向を変え進むと有りました、桜並木が！7部咲き程度でグー。「春が来た、春が来た、川に来た」。



04.大和川本流への合流点から遡行開始



05.丁度見ごろの桜がお出迎え

富雄川右岸（西側）は合流点から暫くは「斑鳩町」であるが、300mほど北上すると「安堵町」に入る。奈良県のこの辺りは小さな自治体が多く密集しており、安堵町の面積は4km²強しかない。大和川沿いの多くの町が平成の大合併で一緒になるテーブルに付いたが、それぞれが歴史を有し纏まらなかったようだ。町内に鉄道の駅は無い。

二番目の町道橋の親柱には和紙の原料のこうぞの皮を剥ぐ作業が描かれている。作業を描いた親柱は誠に珍しい。



06.楮の皮剥ぎ作業が親柱に

土手道は大規模自転車道に指定されているが、今日はほとんど通らない。大和路線（関西本線）の真新しい橋に来て暫し待つと快速が通過していく。橋を通過する音が静かである。橋桁をよく見ると、鋼桁のウェブ（腹板）部がコンクリートに覆われている。逆に言えば、コンクリート桁の上下のフランジ部が鋼材になっている。正にハイブリッド構造である。複合構造橋梁の研究、普及にあたられ、親しくさせて頂いた今は亡き大阪工大の「栗田教授」を想いだす。



07.「大和路快速」が通過



08.鋼桁にコンクリートを併用したハイブリッド桁だ

桁下を潜ると川の中に杭打機、クレーン車などの重機が入り工事中である。土手の反対側には新しい堰の完成予想写真が掲げられている。コンクリートでは無く全面石張りが良いぞー。



09.新しい堰を造成中



10.完成予想写真を土手に掲示

歩いている土手の上の道が「飛鳥・葛城自転車道」だと知らせる看板も有る。大和川とその支流の土手道は自転車道だけだ。

新業平橋に来ると橋際に「業平道」と書かれた解説板が立っている。大和から河内にいる恋人の所に足繁く通った道を言うらしい。愛しい人に会うには千里の道も厭わず、か。



11.川沿いに大規模自転車道が有る



12.在原業平が天理から八尾高安にいる恋人の所に通った道だとさ

7番目の橋を見て遡行と橋の調査はうっちゃって今日のハイライトである「法隆寺」に向かう。ここまで来て世界遺産に行かない足はないでしょう。

街中の道を西に向かうと斑鳩町の古いマンホールが現れる。松と桜があしらわれたどこにでもありそうな絵柄である。家の庭には黄色の実とピンクの花が咲く二本の木が並んでいる。



13.古い斑鳩町の絵柄



14.黄色とピンクが並んではる

道を進むと、ポツポツと大きな豪邸が現れる。塀と瓦が新しい大きな家の塀の角々には7福神の像が道路を見つめている。もっと福来たれなのか、それとも福神にお礼しているのかな？狭い道を曲がると角に古く小さな石仏が隅っこに並び、それぞれに造花の花が添えられている。犬に立ちションベンされないかなー。



15.角々に7福神像が、こちらは福祿寿



16.道の片隅に多くの石仏と造花の花

法隆寺の外側の土塀にやって来て南大門の方へ向かう。土色の土塀と見事に敷き並べられた石畳の道は味わい深く歴史を感じさせてくれる。門の近くまで来ると前に見た町のマンホールのカラーバージョンが足元に現れる。竜田川のモミジと法隆寺の五重塔だ。



17.石畳と土塀の道を法隆寺に向かう



18.カラーバージョンが有った

南大門を潜り境内に入る。法隆寺は何十年も前に来たことがあるがいつ来たのか記憶にない。今日は快晴で気温も二十度近くで絶好の条件である。両側に土塀が続く広い参道を進むと彼方に中門とその奥の五重塔が青空に浮かんでいる。観光客は少なく、京都のような雑然とした雰囲気は無い。カラー豊富な京都からここに来るとモノトーンの世界で心が落ち着く。



19.南大門から伽藍に入る



20.今日は上々の天気だ

入場料 1,500 円は入る前には高いなーと感じたが、出るときにはそれだけの価値が有ったと満足する。中門の西側の入り口から境内に入る。先ずは西伽藍だ。国宝の回廊に来ると眼前に金堂と五重塔が他を圧している。カトリックのカテドラルがその高さ、大きさ、華美な装飾、パイプオルガンの荘厳な音で人を圧倒させるが、法隆寺の姿はそれとは反対の古い木の持つ優しさ、安心感、静寂心の安らぎを与えてくれる。「汝・・・するなかれ」、「汝・・・せよ」との命令調ではなく、「仏に念じ、おすがりすれば良いのだよ」と言っている。中学 1

年の社会で担任の先生から法隆寺の国宝の写真による授業を今でも覚えている
 エンタシス、9輪、水煙、釈迦三尊像などなど。



21.西伽藍から宝蔵院、東伽藍へと巡る



22.世界最古の木造建築、金堂



23.上に行くほど小さな軒になって
 いる



24.年を重ねると最古の建物に似合うな一



25.エンタシスの柱が連なる国宝の回廊

金堂の中にあるご本尊の釈迦三尊像の独特の姿、形の像を拝見し、伽藍北側の大講堂に向かう。柱と柱の間の広い空間には大きな幕が下がり、強い風が幕を吹き抜けていく。中には国宝の「薬師三尊像」、「四天王像」が安置されているがオープンしていて大丈夫かと心配する。仏様にも涼しい春の風を感じてもらうのだろうか。



26.大講堂は吹き抜けて風が通り抜ける

西伽藍から国宝などを収蔵している「大宝蔵院」に向かう。途中の建物も国宝と重文で、国宝と重文の百貨店だ。



27.国宝と重文のオンパレードや

宝蔵院の中には多くの仏像、玉虫厨子、壁画などの宝物が展示され、廻行のことは忘れゆっくりと鑑賞して見て行く。これだけの物を作る制作者がいたということはそれだけの文化、経済力が古代日本には有ったのだろう。

続いて東の少し離れた所に有る夢殿に向かう。昭和30年代に発行された1万円札の透かしが夢殿であった。今の感じでは10万円ぐらいの価値感のある万札であった。夢殿を囲む廻廊の隅には満開の枝垂れ桜が色を添えている。



28.夢殿は右方向に回る



29.枝垂れ桜と夢殿

ここまで来たら「中宮寺」に立ち寄らないでは帰れまへん！500円を払って中に入る。この寺は皇族が門跡を務める尼寺である。これから拝顔する「半跏思惟像」は撮影禁止なので寺が撮影した写真を購入する。この遡行記にはその写真を写した物を載せることにする。

本堂に向かう道の両側には山吹が並んで山吹色の花を咲かせている。池の中に本堂が建っているが、法隆寺の姿を見て来た目にはその違いにびっくりさせられる。靴を脱ぎ本堂に入り暫し憧れの観音像と対面する。横にはこれも国宝の「天寿国曼荼羅繡帳」のレプリカが展示されている。

世界3大微笑（スフィンクス、モナ・リザ）の一つとも言われている観音像は長い年月の灯明の煤が像に付き、つやつやの黒色になっている。1300年間途切れることのない法灯の証である。



30.中宮寺にも立ち寄る



31.山吹の道を進むとご本尊の半跏観音菩薩像に会える



32.この観音像を見ると心が落ち着く

飛鳥時代を堪能し南大門に戻り遅い昼を摂る。両寺訪問に時間を取られたのでこの先の遡行は取りやめ、ちょうど来たタクシーに乗り法隆寺駅に向かう。やっところこういう物が分かる年になり、良い1日を過ごせた。

本日の歩行距離：6.4km。調査した橋の数：7。

総歩行距離：10,355.1km。総調査橋数：12,986。

使用した1/25,000地形図：「信貴山」（和歌山5号-1）